
とある数学の不定積分(インテグラル)

地崎上晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある数学の不定積分 インテグラル

【Nコード】

N8924V

【作者名】

地崎上晶

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録 インデックス 外伝とある科学の超電磁砲外伝、とある数学の不定積分開幕!! インテグラル

主人公 佐天涙子はレベルアップの呪縛から解放され、いつもと同じ、普通のレベル0としての日々を過ごしていた。

だがある日、>数学<の力を操る少女と出会い、運命が一変する一。

#0 幻想にさようなら（前書き）

とりあえず、レベルアップ編終了直後から始まります。

#0 幻想にさようなら

—これは、とある一つの物語の裏に隠れた、もう一つの冒険である—

「初春…迷惑ばかりかけて、ごめんね。あとのことは…よろしくね…」

学園都市のとある学生寮のうちの一室で、とある少女—佐天涙子はその言葉を最後に親友との通話を終え、携帯電話を閉じた。

ずっと握り締めていた御守りと、畳んだ携帯電話を、胸に抱き締める。

先ほどまでのそれとは異なる感情による涙が、彼女の頬を伝って行く。

—バカだな…わたし…あんな風に言ってくれる親友がいるっていうのに、今の今まで、何も言おうとしなかった……—

そのまま、涙子はしばらく泣き続けていた。電話で話していた相手は、初春飾利—ジャッジメント風紀委員でもある親友だった。飾利は聴いてくれた。弱い気持ちから、ズルをした—レベルアップ—に手を出した、自分の話を、今まで心にしまってきた、能力への憧れと、能力が無いことへの悩みを。

一生懸命に、励まそうとしてくれた。おそらくは電話口で目に一杯涙をためながら。

その一言で…どれだけ救われたことだろう。

涙を拭って、涙子は立ち上がった。

せめていつものように笑って、飾利を出迎えようと思ったのだ。

だが…数歩歩いて、激痛が涙子を貫いた。

頭の芯の部分が、刺し貫かれたように痛い。

「な…なに、これ……」

たまらず、涙子はその場にうずくまった。徐々に、痛みは引いて行く。

しかし、恐ろしいのは痛みではなかった。痛みが弱まると同時に、それ以外の感覚…視覚から聴覚、ありとあらゆる五感が、消え失せて、行く。

少しずつ、自分の部屋が遠ざかって行く。

「うい、はる……御坂、さん……」

呟いた言葉も、もう聞こえない。

携帯電話が、フローリングの床に落ちた。

御守りだけは、彼女の手の中に、しっかりと握られていた。

ぐらり、と、彼女の体が前に倒れる。

そして最後に意識そのものが消え、

すべてが佐天涙子から去った。

「佐天さん！」

初春飾利の声は、もう届かない。声と共にドアが開いたのは、そのすぐあとのことだった。

／

深い、深い、暗闇のなか。何も、見えない。何も、聞こえない。

自分の体は自分のものではなく、自分の心も自分のものではなく、ぼんやりと霞みがかかっている。他にも自分と同じようなモノ達が、真っ黒な世界をゆらゆらと漂っている。

どのくらい、暗闇のなかに沈んでいただろうか。

聞こえないはずの音が、どこから聞こえてきた。音は、声だった。

—いつも、そうだ…いつでも、力で地に這わせられる。—

—ならば手に入れるしか、ないだろ……自分だけの力を—

レベルアップパーという呪いに取り憑かれ、道を踏み外したモノ達の、悲しい声だった。

—能力が無くても平気だなんて、嘘だったのかな……でも、これがあれば……— 自分の、かつて呟いた言葉も、聞こえてきた。

「わたし、何の能力も無い自分が嫌で…でも、憧れは捨てられなくて…」

すると、突然、別の声が聞こえてきた。

「もう一度、頑張ってみようよ」

聞き慣れた、とある能力者の声。

「そんなところで道草食ってないでさ…もう一度！」

同時に、チリン、と涼音。

頼もしい放電音が鳴り響き、青い電光が闇をすべて呑み込むように広がり、

そして、弾けた。

／

パチリと目を開けると、知らない白い天井が視界に広がった。

ベッドの上で体を起こすと、忙しく働いていた看護師の一人が近寄ってきた。

「…大丈夫？どこか痛いところはない？」

「えっと…無いです、たぶん。」 事実、頭も体もすっきりしていた。窓の外に見える街はオレンジ色に染まっているのに、気分はすっきりし過ぎて、かえって変な気分がした。

「良かったわ。あなたは他のかたよりも目覚めるのが遅かったから、少し心配だったの。さ…もう少し、横になっていなさいね」

微笑んで、看護師は去っていった。

「……」

涙子は、看護師が遠くに行ったことを確かめると、そっとベッドから降り、スリッパに足を通し、病室から外に出た。

風のふく屋上に出ると、そこからは夕焼けに染まった学園都市の景色が広がっていた。

その景色を少しだけ眺めると、涙子はフェンスのそばまで歩いた。立ち止まって、いつかそうしたように、体の前で両方の手の平を上にもむけ、構える。目を閉じ、意識を集中させる。ヒュゴウ、ヒュゴ

ウ、と、風の声が聞こえる。

目を開ける。

両の手の平には、何もない。

ヒュゴウ、ヒュゴウと、ただ風の声が聞こえる。

しばらくして、涙子は口を開いた。

「結構安心……ちよっぴり残念……かな」

「でも……もう、これで、……いいんだ。」

涙子は、その手をじっと見続けていた。

そのとき、屋上のドアが、勢いよく開かれた。

「佐天さん！」

振り返り、そこに肩で息をする親友の姿を認め……佐天涙子は、静かに微笑んだ。

このとき、誰が知っていただろう……このあと、このとある少女を、世にも奇妙な物語が待ち受けていることを。

「クシュン！」

「あれ？佐天さん、風邪ですか？」

「やっぱり、まだ寝てたほうが良かったんじゃない？」

「そ、そんなことないですよ、わたしはいつもどおり元気いっぱいですよ？」

「どなたかが佐天さんの噂をしてらっしゃるのかもしれませんがね……」

「え？」

「特に、殿方だったり……？」

「ええっ？」

もつとも、今このなんとも平和な瞬間に気付け、というのも酷な話ではあるが……

／
続
く
／

#0 幻想にさようなら（後書き）

まだ数学は出てきませんが、お楽しみに！

次回予告

涙子「どうも♪佐天涙子です！今回はわたしが主人公ってことでドキドキしてまーす！

ところで、タイトルのインテグラルって何のことなのかな？初春、知ってる？」

初春「さあ…数学のなにかなんですよね？固法先輩なら知ってるかも…」

美偉「あら、呼んだ？ インテグラルはね、高校数学の微分積分で使う記号で、凄い役割があるのよ」

涙子「高校数学？ムズかしそう！でもおもしろそう！どんなのなんですか？」

美偉「そうね、ひとことで言う…」

黒子「ストロップ！ネタバレは禁止ですよ！それとタイムオーバーですわよ！」涙子／飾利／美偉「えー！」

「???」「こほん…では、次回、とある数学の不定積分、第1話。皆さん、是非またお会いしましょう…」

黒子「ど、どなたですの？」???「…青い問題集…覚えて置いて下さい、それが勝利の鍵です…」

美琴「答えなさいよ！あんた何者…」

次回予告（後書き）

キャラの会話を書く練習を兼ねた次回予告です。黒子は難しいですね？

これからは後書きに載せます。

#1「邂逅一であい」(前書き)

いよいよ本格スタートです！

以前に感想を下さった方、ありがとうございます！頑張ります！

#1「邂逅一であい」

たとえどんなに強力な能力者であっても、日が沈み、また登るのを止めることは出来ない。それはレベル6ですら変えられぬ天地の理。

だが：日が登る前の闇に隠れ、何かをしでかそうとするものは確かに居るのだ。この第7学区もまた、その例外ではなかった。

「あ？ テメ、貴様今なんつった？ もっかい言えや、コラ！」

「あー、うっせっーな。もっぺん言ってやつからその耳かっぽじりやがれ！ この学区はいまからこっちの狩場になんだよ！ わかったらとっと出てけ！」

「ほーう。だったら拳で分かせてみるや！」

ネオンサインが照らす闇夜の郊外に、今夜もスキルアウトの怒号が響く。

出で立ちの異なる、それぞれのグループの代表とおぼしき2人の男が、拳を振り上げた。

「やってやろーじゃねーか！」

「はーい、そこまでや。三文芝居は止め止め。上映時間も間違ってるで」

パンパン、と手を叩く音が声と共に聞こえ、スキルアウト達が動きを止める。声のした方向を向くと、そこにいたのは中学生ぐらいの少女だった。黒いジーンズを穿き黒いパーカーを羽織った、全身黒ずくめの少女。更に少女の顔の一部を隠す程長い髪は雪のように真っ白だった。

「アン、なんだよテメエは。ジャッジメントか？」

「言ったほうがええん？ うちの身の上話なんかしてたらお天道さん登ってまうで」

「そのお天道が拝めねえ体にしてやろうか！」 「まあまあ落ち着きいや。大人しくしてくれればうちはノープロブレムやねん。怪我せ

「へんし誉めてもらえるし、正直に吐いてくれればそれで終わり。ええことづくめや」

「ナメた口ききやがって、テメエからギタギタにしてやる！おいおめえら、アレ流せ、アレ！」

すると、どこからともなく、耳をつんざくような音が鳴り響いた。「けっ、どうだ手も足もでねーだろ。キャパシティダウンだぜ！！俺らスキルアウトをナメンじゃねえぜ、第7学区のジャッジメントさんよお！」

黒衣の少女は俯き、耳を押さえている。スキルアウトのリーダーは勝利を確信した。そして拳を、少女の小さな頭に振り下ろそうとした、まさにそのとき。「：ゴメンやけど、うちには効かへんねん：その音。どっかのだれかさんは引かなかったようやけどな。」男達は、目を見開いた。華奢な少女の背中から生えた第3の”手”が、拳を受け止めていたからだ。

「逆らう輩には容赦せえへんで。神妙にして：縛につけや」

驚くべき現象が、彼らを襲った。少女のすべての髪の毛が突如50メートルほども伸び、一本一本が丸太のように太くなる。そのそれぞれの先端に黒い髑髏が現れ、口を開く。

彼らは、化け物と化した少女から、大急ぎで逃げ出した、いや、逃げようとした。走り出すより先に髑髏の口から伸びた牙が、彼らを突き刺した。少女は大きく口を開け：彼らを、呑み込む。「あ、それとな：うち、第7学区のジャッジメントやないで」

スキルアウト達全員の意識が、碎ける。

「ジャッジメントってトコもちよい引っかかるんやけど：まあ置いとこか」

数分後。

「情けな。あれぐらい耐えられんのかいな、大の男が」

（ムチャを言うな。お前の作った幻像は悪趣味だろうが）
テレパシーを使った仲間の声。

「んなこと言わんというや、手加減したやん」

（あれでかよ）

「それよりソウたん、さっきのめっちゃえタイミングやったで！
ありがたいな♪さ、アンチスキルに連絡連絡♪つづたん、ちゃんと
起きとるかな？」

（お前の顔が知られると後あとまずい。早く立ち去れ）

「分かっってるって」

そして、少女は黒いパーカーを翻してそのばを去った。置き土産に
数十人の気を失ったスキルアウトを残して。

「スキルアウト？またでたの？」遠くに回る風車の見える、第7学
区の街角。涙子は携帯電話で飾利と話しながら歩いていた。

「はい、今日の明け方に通報があったそうなんですけど、ほかの支
部のジャッジメントが向かったら、スキルアウトも被害者もいなか
ったらしいんです」

「嘘の通報じゃないの？」

「それはありません、通報してきた数十人の証言が一致してますか
ら。ただ、ビッグスパイダーとは別のスキルアウトみたいですけど」
「ふーん。で、初春はその支部の仕事を手伝ってる」と

「はい…」

「せっかく参考書選ぶの手伝うって言ってくれたのにねえ。」

「すいません、佐天さん…白井さんも御坂さんとストレンジにいっ
ちゃったし、固法先輩は来ないし、わたしが協力するしか…」

「しょうがないなあ、この埋め合わせは必ずしてもらうからね」

「は、はい、出来ることなら…」

「もう本屋に着いちゃったし…音楽雑誌でも読んでくよ。」

「そう言えば佐天さん、パソコン故障したって言ってませんでした
？」

「うん…おかげで音楽情報サイトにアクセス出来なくてさあ。レベ
ルアップパー入れてたプレーヤーもまだ戻ってこないし…踏んだり蹴

ったりだよもう」

「じゃあ、お詫びに今度わたしがそのパソコンみてみます。直す方法、分かるかも知れません」

「え、いいの？ありがとう」

「じゃあ、切りますね、佐天さん」「うん、頑張るんだぞ」
携帯をしまい、涙子は本屋の自動ドアをくぐった。

雑誌コーナーに行き、良く読む音楽雑誌を1冊取って広げる。だが、好きなバンドの記事はなく、つまらなく感じてページをパラパラとめくる。

そのとき、視界の下隅に黒いなにかが飛び込んできた。雑誌から目を離し、そちらのほうを向く。

タイルの床に、一枚の真っ黒なカードが落ちており、その数メートル先を、長身の男子学生が歩いて奥のほうへと向かっていた。

「あの…落としましたよ？」呼びかけに気付いていないのか、短かく切った髪と黒いブレザーの背中が、隅にある学習参考書のコーナーへと消える。

「あの、…」

涙子は雑誌を棚に戻し、カードを拾い上げた。カードは紙ではなく、薄い金属でできている。白いアルファベットと数字で何事か書かれている。

「マーキングナンバー、00FFFF：マーク・azul…？」

涙子の知っている英語で読めるのはそれだけだった。本屋で大声を出すのはマナー違反、と飾利に叱られたことがあるので、涙子はそれ以上声を挙げずに落とし主の後を追った。

「あれ…？確かにここに入ったはずなのに」

参考書コーナーに居るはずの落とし主の姿は、なぜか見当たらない。それどころか、人っ子一人いない。周囲をきよろきよろ見回していると、ちょうど自分の目の高さのところにある参考書の背表紙が目に入った。「キャプチャー式・基礎からの数学？＋B？」

さして数学が好きというわけではないがそこそこ出来る涙子は、なにげなくその青い問題集とセットになった参考書を取り出してみた。適当に開いたみたところ、「微分・積分方程式」とタイトルが書いてある。

「これ、高校数学のだ…わたしにはまだ早いかな？ 難しそうだし」

「そうやな、まだ早いかもしれへんな？」

「ひよえあ?!？」

「わっ、そんなに驚かんというてや、こっちがびっくりするやん」

いつの間にか後ろに立っていただれかの声に、涙子は頓狂な声を出した。振り返ると、全身黒ずくめの同年代の少女がけたけた笑っている。

顔の右側を、白く恐ろしいほど長い（十福より5倍以上）前髪が覆い隠している。

「って…あ、あなた、誰？」 「まあそう怪しまんというてや。あんたにアドバイスしたろと思ってんやから。あ、うちのことはココって読んでな」

「あ、アドバイス？」

「そや。このコーナーで、最初にそれが目に入ったんやろ？」

黒ずくめの少女ーココは涙子の手にした問題集を指差した。

「うん…そうだけど」

「せやったら、その「青キャプチャー」買うべきやな」

「え…」

「何故なら、それがあんたの適性にいっちゃん合ってるからや…それを使えば、あんたは次のステップへと進めるんや」

「ちよつと、何のこと言ってるのかわけがわかんないよ!」

「今はええねん、分かんのが当たり前やからな。」

…白、黄色、青、赤、出回つとるキャプチャーで最初に青がヒットしたのは初めてや…あんた結構先が楽しみやな」

「え…?」

「ほんじゃ、またどっかでな。ちゃんとそれ買うんやで」

ココは踵を返し、出口のほうへ歩いていった。

「ち、ちょっと待ってよ…」涙子はその後を追ったが、ココが本棚の裏に消えたところで見失ってしまった。「な…なんでこの本屋、人がすぐ消えるの？」

／

取り敢えず、いわれた通り、「青キャプチャー」を買った涙子は本屋の外にでた。「なんなんだろう、あの子…どっから見てもわたし中学生なのに、高校数学の参考書なんて…」

そのとき、ポケットの中の携帯電話から、着メロが聞こえてきた。angel aの「Shangela」である。機体を開いて、耳に当てる。

「もしもし?…初春? どうしたの…え? 支部に行って資料を取って来て欲しい? 今すぐ? 初春、いまどこ? ……うん、うん。分かった、すぐ行く」

一ま、この問題集のことは後でかんがえよ。

頭の中で呟き、涙子は歩き出した。

／続く

／続く／

#1「邂逅一であい」（後書き）

後書きと次回予告はしばらくは別々で載せます。 さあ、早速オリジナルキャラが登場しました！私は結構この子気に入ってます。どうぞ可愛がってやって下さい。> ((<

#2 キャプチャー式問題集（前書き）

スツゴい遅れてすみません…。第2話です。

もしも中学生の佐天涙子さんが高校数学にハマったら？

#2 キャプチャー式問題集

「佐天さん、佐天さん！」

とある風紀委員（ジャッジメント）、初春飾利は、バスの隣の席で寝入ってしまった親友を揺さぶっていた。

「起きてください、もう着いちゃいますよ」

「：うーん：あと5分：：：」

「なに寝ぼけてるんですか！降りちゃいますよ！」

「ほら、春眠暁を覚えずっていうじゃない？」

「今は夏です！あと夕方です！！」

「ふわり、あーよく寝たあ」

二人がなんとか遅れずに降車すると、涙子は大きく伸びをした。

「起こしてもなかなかおきませんでしたね」

「しょうがないでしょー？資料届けに行っただけなのに、なんかいきなり働かされたんだもん」

「ジャツジメントと間違えられたんですね…お疲れ様です」

「腕章はどうしたって言われても、なんて答えたらいいかわかんなくて困っちゃったよ」

「もうだいぶ遅い時間です…」

話しながら歩く二人の影が、煉瓦敷きの歩道の上に長く伸びる。

「そう言えば、結局本屋で何か買いました？」

「ン？ああ参考書のこと？こんなの買ったんだけど」

涙子は鞆を開き「青キャプチャー」を取り出す。

「数学？＋B？高校のじゃないんですか？」

「んー、ちょっとややこしいんだけどさあ…」

涙子が謎の少女ココに強く進められてこの問題集を買ったいきさつを話すのに、3分間の時間を要した。

「そんな人がいたんですか」

聞き終えると、飾利はそう呟いた。

「うん…ヘンだよ、わたしどこからどうみても中学生なのにさ」

「でも佐天さんはその問題集を買ったんですか？」

「気になっちゃって、さ」

「それで、使うんですか？」

「買ったやつたもんはしょうがないからね」

「高校数学なら、固法先輩に話を聞いてみればいいと思いますけど」

「そうだね。今度そうする」

夏とはいえ、夜は確実に迫ってきた。あちこちの街灯に光が灯る。

「それじゃ、また明日」

「はい。お手伝い、お疲れ様でした」

そんな言葉を交わし、涙子と飾利は別れた。

自分の部屋に入り、ベットにダイブ。

そのまま寝てしまいそうになるのをなんとかこらえ、起き上がって時計を見る。午後6時43分。夕食を作らなければならない。自分の部屋では起こしてくれる人はいない。調理を済ませ、テーブルに運んで「いただきます」と手を合わせる。自分で作ったものだし誰がみているということもないが、気分の問題である。食べた後の片付けを済ま

せ、お風呂も済ませ、さあ寝るかどベッドに腰掛けたところで、机の上に置いた「青キャプチャ」に目が留まる。

「…今みとこつかな…明日は4人で遊びに行くんだし…」

何故か、青い表紙をみているとそんな気になった。机に座り、最初のページを開く。

でかかと、「

ようこそ数学の世界へ」

と書いてある。どうやら、このSK出版の「キャプチャー式」は段階式になったものらしい。説明書きによれば、「白キャプチャ」、「黄色キャプチャ」、「青キャプチャ」、「赤キャプチャ」の5段階でステップアップする、とある。（わたし中学生なのにいきなり青キャプチャからやって大丈夫なのかなあ…）と思わないわけでもないが、（ま、ムリなら高校にあがるま

で置いとけばいいや」と
気楽にページを繰った。
しかし、「青キャプチャ」
は、一言で言うと、面白
かった。勿論いきなり書
いてあることがすべて分
かったわけではない。
ただ、今習っている数学
とはあまりにかけ離れた
内容に、旺盛な好奇心が
掻き立てられたのだ。

ページを繰るたびに未知
の公式やら法則やらが目
に入り、いつしか紙に書
いて実際に解いてみるこ
とまでしだした。（こん
なに夢中になるなんて…なんかわたしじゃないみたい）

涙子は本来勉強好きでは
ない。参考書だって、飾
利が「わたしも買いに行
きます」というから買お
うかな、としか考えてい
なかった。だが今は時間
のことも、眠気のこと
も、すっかり頭から消えて
いた。

どのくらいの間、そう

していただろうか。いつしか床につけた足の裏の感覚も、ページをめくる左手の感覚も遠くなっていた。

感じるのは己の目に吸い込まれていく数式の群れ、そしてそれらの意味を咀嚼していく己の頭のみ。

《ねえ……聞こえる……？》

涙子の耳に、どこからか、非常に透き通った声が聞こえてきた。それすらも、涙子をはじめは全く気にならなかった。だが、その声の主は涙子が聞いているかどうかなど意に介さぬかのように、もう一度、こう囁いた。

《聞こえたら……こっちに来て……お願い

……》

「……………えっ……………？」

急に意識が閉塞し、何も考えられなくなった。

ドンドン、とドアを叩く音が聞こえるような気がした。声も聞こえる。誰？

「佐天さん！」

重い瞼を開けると、開いたままの青キャプチャとノートが見えた。どうやら机に突っ伏して眠ってしまったらしい。

「しょうがないですわね」

声と同時にシュオンと音がする。振り返るとそこに飾利と黒子が立っていた。

「初春と白井さん：なんでここに？」

「何度電話しても出ないので心配になって来たんですの。ノックにも反応がないから室内に瞬間移動したんですのよ」

「えっ：どうもすみません」

「謝るのなら初春にしてくださいな。私は初春に頼まれて来ただけですの」

「全く：なんでこんな時間まで机の上で寝てたんですか！？」

時計の針は10時43分を指していた。

「ご、ごめん初春」

ふと、飾利は机の上の青キャプチャに目を留めた。

「！！佐天さん、もしかして一晩中これを解いてたんですか！？」

「うん、寝ちゃったけど」

「雪でも降るんじゃない？」

「それどーいう意味かなあ、初春」

軽く飾利を睨む涙子。

黒子が苦笑を浮かべ、

「あの、仲良しも結構ですけどまずはお召し替えなさったらいかが？ お姉様がファミレスでお待ちですの」

「あ、はい、すぐ着替えます！」

制服を用意しつつ、涙子は夕べの声は何だったのだろうと考えた。

(幻聴？ いやまさか…)

#2 キャプチャー式問題集（後書き）

まだ物語は序盤ですね…。次回も読んでくださると嬉しいです。

#2. 5話「とある顧問の小休止 (インターバル)」 (前書き)

更新がカメより遅いくせしてまさかの2. 5話です……すいません

m (|) m

オリジナルキャラである夏櫨許己呂の視点です。

#2. 5話「とある顧問の小休止（インターバル）」

「ふあゝ、今日も朝からええ天気やなあ」

黒いジーンズに黒いフード付きパーカーを着込み、垂らした長く白い髪で顔の右側を隠した少女が、誰に言うともなく呟いた。

「それにしても、たった一晩であんなとこまで読み進んでまうとはな…あの子」

ココと名乗る少女の視線の先には、アパート風の学生寮から出てきた3人の少女。一人はツインテール、一人は長い黒髪、残る一人は造花のたくさん付いたカチューシャ。中央の長い黒髪の少女が、ココが言う「あの子」である。ココは学生寮の向かいの建物の屋上に座り込んでその少女を目で追う。

「今日はまだコンタクトできひんやろな。お友達との楽しい時間を邪魔すんのは趣味やないし」

《安心しろ。お前の趣味は十分過ぎるほど悪趣味だ》
ココの脳内に、抑えた調子

の少年の声が届く。

「お、ソウたんやん。スキルアウト気取りの格好つけはなんか吐いた？」

《ああ、吐くわ吐くわで掃除が面倒》

「やっーぱ、ボクチン強いんだぞ症候群？」

《ああ。報告は済ませた。処置は……》

「いつもの。ポテンシャルカードアンインストール所有関数証明書剥奪で。永久やなく一時……やろ？」

《ああ。いつもの通りだ》

「全く……甘いんやから。ま、そんな甘い《上》のお陰でこちらが儲けさせてもろとるんやけど」

ふ、とココは笑った。

「あ、あと最高顧問に伝えとって、涙子を誘うにはまだ早いやろってな。」

《僕が……か？》

「えー加減《上》の扱い慣れなアカンよ、ソウたん」

《1つ要望がある、夏櫨許己呂》

少年の声は言った。

「ココでえーよ、もう。ソウたんのためなら火の中水の中やけどなんなん？」

《……その呼び方を、止めて欲しい》

「…ほう。だが！いつつ、いんぽっしぶる♪ちゃんと決めたコードネームやん☆」

たのしげなココの声。

《やれやれ…ところで、あの子の記録名は？》

「そうやな……佐天涙子やから……るいたんでどや」

《却下。同じ苦しみを味わさせたくない》

「せやったら、ティアーてのは」

《ティアー？……なるほど、涙の少女というわけか》

「ぴったりやと思うんやけど。最高顧問の了承とれたらこれで決定や」

《そうか。じゃあまたな》

「お、忘れるとこやった！例の《いやな音》はどうなったん？」

《アンチスキルに引き渡そうと思ってたが…出来なくなった。調べたがあれは模造品だ。オリジナルを渡さなければ意味がない》

「そっかー、仕方ないな。…ほんなら、あそこのジャッジメントさんと超電磁砲さんが守備よく手に入れてくれるの祈るとしますか」
《ストレンジに乗り込むか？》

「いやあ、それはムリやろ。アンチスキルの掃討作戦に巻き込ま

れんのは御免やでえ」

《そうだな…》

「ほんならまたあとでな、ソウたん。昼一緒にご飯いこな〜♪」

《出来れば遠慮したいんだが…》

「何言うてんの★そんなんやったらモテへんで」

《少しは僕の財布の中身のことを考えてくれ》

「ソウたんとデート♪楽しみやなあ〜♪」

《…仕事の付き合いを勝手にデートにするな。切るぞ》

少年の声が消える。

「全く：照れ屋さんやなあ」

ココは心底楽しそうに笑い、立ち上がった。遠くのほうに、先ほどの3人が見えた。今日も、夏櫨許己呂という黒ずくめの少女の日常が始まる。

／続く／

／次回予告／

涙子「固法先輩が元スキルアウトだったってホントですか!?!」

黒子「佐天さん、これインテグラルの予告ですの」

涙子「あ、そうだった！じゃあ、えーつとえーつと…」

初春「あ、この紙に次回のヒント書いてますね。えつと……次回、とある数学の不定積分第3話、t e a r。勝利の鍵は、黒きジャッジメント？」

黒子「何のことですの……？」

ココ「みんな次回もよろしくな」

美琴「どこからでたの？つかあんた誰なの？」

ココ「シーユーストタイム♪」

#2. 5話「とある顧問の小休止（インターバル）」（後書き）

さて……この次回予告ですが、実は往年の名作ロボットアニメ（少なくとも地埼上のなかでは）の次回予告へのオマージュ? だったりします。

分かる方は是非とも感想などで伝えて下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8924v/>

とある数学の不定積分(インテグラル)

2011年10月10日11時02分発行